英語の語順変更について

On word-order changes in English

葛　西　清　蔵

英語を特徴づけるにはいろいろの方法があるであろうが、まずあげられるのが、語形変化のないこと、語順が固定していることであろう。

固定された語順は英語ではきわめて重要な役割をもつため、この語順の移動には多くの制限がありうる。語順の移動自体は純粋に統語的なことであるにもかかわらず、統語的な方法では扱いきれない例も多い。この種の例文には意味的・機能的なことがかかわっており、これを統語的な一つの視点から、語順の移動の問題を処理しようとするのは不十分である。本稿の目的は、英語では、語順の移動には意味・機能を考慮しなくてはいけないこと、とりわけ、特定的で意味的に優位なところが語順移動のさまたげになることを主張する。議論はつぎのような章わけですすめる。

0．英語の語順：「まえがき」にかえて
1．語順の移動をさまたげるさまざまな制限
1.1　Structure-preserving restriction（構造保存制約）
1.2　Island constraint（島の制約）
1.3　A-over-A principle（上位範疇優先の原理）
1.4　Pied piping（随伴）
1.5　Superiority condition（優位性条件）
1.6　Subjacency condition（下接の条件）
2．Gestalt 心理学の視点
2.1　近接
2.2　よい連続

2.3　閉鎖
3．制限をすり抜けたいくつかの例
3.1　等位構造制約の場合
3.2　随伴の場合
3.3　下接の条件の場合
3.4　複合名詞句制約の場合
3.5　上位範疇優先の原理の場合
3.6　下接の条件の場合
4．問題解決への視点
4.1　Reanalysis（再分析）
4.2　Preposition stranding（前置詞残留）
4.3　Bridge verb（架橋動詞）
4.4　Specified subject condition（指定主語条件）
5．まとめ

0．英語の語順：「まえがき」にかえて

英語史では、1100年、1500年を境に、古英語、中英語、近代英語の三つの時代に区分するのが普通である。語尾変化の点からこれらの時代を特徴づけると、古英語は「完全な語尾変化」（full inflection）の時代、中英語は「水平化された語尾変化」（leveled inflection）の時代、近代英語は「語尾変化のない」（no *or* lost inflection）の時代、ということになる。古英語では保たれていた性・数・格での複雑な語尾変化が、中英語では-eに「水平化」されてしまい、近代英語ではなくなってしまった、というわけである。複雑な語尾変化をもった古英語では、語順の変更が比較的自由であったといわれる。語形で、その語の機能がわかるからである。たとえば、

a　Se mann sloh þone beran.

b　þone beran sloh se mann.

c　Sloh þone beran se mann.

(a)、(b)、(c) は、se mann (the man)、sloh (killed)、þone beran (the bear) の語順がちがうが、いずれも The man killed the bear. を意味する。Se mann は「男性名詞」se mann の「単数」・「主格」であり、sloh は原形 slean の「直説法」・「単数」・「過去」であり、þone beran は「男性名詞」se bera の「単数」・「対格」である。Se mann、þone beran は、その位置がどこであれ、いずれもその語形から、それぞれ主語、目的語であることがわかる。

時を経て、次第に語尾変化が失われるにつれ、語形だけでは、どれが主語で、どれが目的語か区別できなくなり、結局、動詞の前にあるものが主語、動詞のあとにあるものが目的語、というように「文の中での位置」、つまり語順でその語の機能を示す、ということになったというわけである。

このように、その語の「文のなかでの位置」、語順はその語の機能を示すのに決定的な意味を担っている。英語でこの語順が重要なことは Fries (1961) に 'the pressure of word-order pattern' という言葉があることでもわかる。

たとえば、現在では「私はその本を気に入っている」の意味での I like the book.は、古くは、me liketh (=pleases) the book. (「その本は私をよろこばす」) であった。後に me が動詞の前であることから I になり、主語であった the book が動詞のあとにあるということで目的語にされる、ということになった。

また to dream a strange dream のような「同族目的語」でも、dream という「自動詞」が a strange dream という「目的語」をとるのは、それが「動詞のすぐ後」という位置 (area) にあるからに他ならない。中島・毛利 (1964：101) は自動詞なのに、すぐあとにあり名詞が目的語になるのを「自然のなりゆき」だという。語順のもつ力はこのようにきわめて強いものである。

また、The clock ticked the baby awake. という「結果構文」や、She smiled her way to stardom. などで、これらの「構文」そのものが意味をもつ、とい

う考えにも語順のもつ重要さがうかがえる。

このような重要な役割を担わされている英語の語順の変化は最近の文法でどう扱われてきたであろうか。以下ではこれを見ていくことにする。

1．語順の移動をさまたげるさまざまな制限

1.1 Structure-preserving restriction（構造保存制約）

文の要素の基本的な順序を守ろうとする、ということのついては、まずEmonds (1972) をあげなくてはならない。すべての表層構造を変形によって深層構造からみちびきだそうとする文法では、どんな文でも変形規則で生み出せるという点で、変形規則に非常につよい力をもたせることになった。これを制限するために変形に大きな制限があるとするのが、この制限の主旨である。この制約はつぎのように定義される。

変形規則は、ある範疇 c の要素を「句構造標識」(phrase marker) の中で同一の範疇 c の節点により占められている位置にのみ移動することができる。

これは、二つのタイプがあり、それは(1)根変形(root transformation)：要素を、それをふくむもとの文の範疇の箇所に移動する変形、(2)局所変形 (local transformation)：一つの句以外の節点とそれに隣接する要素に言及する変形があり、ここから上の構造保存制約は「局所変形でない変形規則は構造保存変形か根変形にかぎられる」ということになる。

これは、後に Ross (1973) の「同側フィルター」(same side filter) で説明される (b)

a　That John has blood on his hands proves (that) Mary is innocent.
b　*It proves (that) Mary is innocent that John has blood on his hands.

の非文も自動的に排除する。

これは変形規則の種類を少なくし、結果的には恣意的な語順移動をなくする

ものであるといえよう。

1.2 Island constraint（島の制約）

Ross (1967) は、或る要素Yが、構造Xの内部にあるとき、その外部にYを移動したり、外部の要素とYを何らかの関係で結びつけることができない場合、その構造Xを「島」(island) であるといい、概略、要素の移動は不可能である領域であるといえる。どのような統語的環境が島を構成するかを定式化したものが「島の制約」であり、これにはつぎのようなものがある。

1.2.1 Complex NP constraint（複合名詞句制約）

a　You believe the claim that John saw Mary.

b　**Who* do you believe [$_{NP}$ the claim [$_{S}$ that John saw…] ?

that John saw Mary という同格節をもつ the claim 節（複合名詞句）の Mary を who として抜き出すことはできない。

1.2.2 Sentential Subject Constraint（文主語制約）

a　[That Mary will beat John] is likely.

b　**Who* is [that Mary will beat…] likely?

主語になっている that Mary will beat John からは John を who としての抜き出すことができない。

1.2.3 Coordinate Structure Constraint（等位構造制約）

a　I might go to the movies [today or tomorrow]

b　**Tomorrow*, I might go to the movies [today or…]

today or tomorrow という等位構造から、その一部である tomorrow は抜き出せない。この場合も基本的な語順が混乱することになる。

1.2.4　Wh-island Condition（wh 島条件）

a　He wondered [John put the book on the desk]
b　**What* did he wonder [where John put…] ?

the book を what として移動させるにも、what の着地・脱出口(escape hatch)はすでに where に占められているので、疑問節 where John put what という疑問節の中から、その一部 what は抜き出せない。

1.2.1－1.2.4 の例文でみるように、複合名詞句、文主語、等位構造、wh 疑問文からその一部を文頭に移動させたものであり、いずれも非文となっている。これは、言い方を変えると、一つの構造の要素を、より大きな構造（ここでは主節文）の中に移動させた、ということになる。

1.3　A-over-A Principle（上位範疇優先の原理）

上の 1.2.3 で、[today or tomorrow] の中の一部、tomorrow だけを移動させて非文になる場合を見た。このようにある変形規則が、ある種類の句に適用できる場合、それが同種の最大の句に適用されなければならない、とするのがこれである。さきの例でいえば、[today or tomorrow]の一部である tomorrow だけでなく、それを含む句全体 [today or tomorrow] を移動させて、

Today or tomorrow, I might go to see movies.

よすべきであるとする。このほうが、today or tomorrow の一まとまりとしての機能も明白で、主節文の語順をみださないですむ。「文頭にある要素を、その文の主題として機能とするため、重要度の低い情報をになっている」（畠山 2004：229）のであろう。

この「上位範疇優先の原理」は Chomsky (1964) の考えで、1.2.1－1.2.4 で見た Ross (1967) の「島の制約」の提案の糸口となった。

1.4 Pied piping（随伴）

これは、上の 1.3 でみたことにも関連する。

a John was speaking [$_{PP}$ to whom] yesterday ?
b [$_{PP}$ To whom] was John speaking…yesterday ?

to whom のうち whom だけを移動するのではなく、前置詞 to を「随伴」させて移動する現象をいう。1.3 で見たように一つの機能体を分割しないで、そのまま全体として移動させる方が語順をたもち、その部分の機能が分かりやすいことになる。

1.5 Superiority condition（優位性条件）

句構造標識で、範疇 A が、範疇 B より上位にあるとき A は B より優位であるといい、A に先に変形がかかる、というもの。例えば、

a You think [who saw what]?
b Who do you think…saw what?
c *What do you think who saw…?

(a) から上位の who を移動した (b) を導きだすことはできるが、下位の what を移動した (c) は導きだせない。これは、who が what よりも語順の点で先に

あるから、ということになる。(c) では、目的語 what が、主語 who の前に出ている。

1.6 Subjacency condition（下接の条件）

境界理論（bounding theory）の中心的原理で、上で見た「島」の制約を一つの枠組みで説明してくれるもの。これは移動変形が境界を一文で二つ以上越えて移動できない、という条件で、たとえば

*Who did you hear [^{NP} stories about [^{NP} a picture of…]]?

この文の要素の移動に見るように、移動規則は一度に二つ以上の循環接点 NP、S を越えて適用されてはならない、とするものである。この条件は要素の移動をできるだけ近くで抑え、語順を大きく乱さないようとするあらわれと見ることができよう。

ここまで見てきた 1.1−1.6 の一連の規則と振るまいを見ると、英語は基本的な語順をしっかり守ろうとしていることが明らかである。これまでの議論から、およそ「移動された要素の機能が明確であるかぎり許容される」（葛西 2007：115）といえるかもしれない。(1)

であればこそ、

I wouldn't trust [him$_i$] for amoment, [your brother-in-law$_i$].

のような「右方転移」(right dislocation)、また、

[The princess$_i$], you have to take care of [her$_i$].

などの「左方転移」（left dislocation）も各要素の機能がはっきりしているから可能なはずである。

田子内・足立（2005：93）の「早期直接構成素の原則」（the Principle of Early Immediate Constituent）の、「統語解析過程の早い段階で直接構成要素の認識を可能とする語順」を望ましい、とするのも、できるだけ明解に、語順で各要素の機能がわかることが望ましい、と言っているものであろう。(2)

また、つぎのことも重要な傍証になるであろう。一つめは、「付加部条件」（adjunct condition）で、付加部の一部は移動できないが、補部（complement）の一部は移動できる、とするのは、補部は位置的にも機能がはっきりしているからであろう。二つめは、文の必須部分である補部とちがい、従的部分である付加部が移動しやすい（'the position of adjuncts within clauses is flexible' Collins 2005: 282）という。

2．Gestalt 心理学の視点

Ross（1967）は「島」についてのべたあと、「島」は 'psycholinguistic entities' のように振るまうのではないか、つまり「島」の統語現象が心理的なものではないだろうか、と疑問を投げかけて論文をおわっている。Lakoff（1979）は、知覚処理（cognitive processing）をふくめ、すべては gestalt とよばれる構造によって組織立てられている、といい、Chomsky（1988）は、われわれは、まわりの世界を gestalt によって解釈する、という。ここでは、gestalt 心理学の観点から、語順にかかわることを概観する。

Gestalt 心理学によると、われわれは対象を、「よい連続」、「近接」、「閉鎖」、「類似」など、できるだけ「安定した」形で把握する傾向がある、という。（葛西 2004 参照）

2.1 近接

a Each of us have decided to discontinue our membership.

b There is/?are a girl and two dogs in the room.

c I hate John/him coming so often.

d *We want very much [John to be there]

(a) の have は、すぐ前の us に影響されていれためであるし、(b) で、are が？で、is が許容されるのは、すぐあとの a girl に引きずられるからであろうし、(c) で、hate の対象は John, him ではないから、John's, his でなければならないはずが、John, him となっているのは動詞 hate のすぐあとにあるからに他ならない。これに関係ぶかいのが (d) である。ここでは very much が John の前にあるために、John が want から「目的語」の資格をもらえないために非文となっている。want, John が隣接していないために、「格理論」に抵触したのである。

2.2 よい連続

Grosu (1972) には、つぎのような制約があり、(a) に対する (b) の非文を説明してくれる。

Internal clause constraint: Sentences containing an internal NP that exhaustively dominates S are ungrammatical.

a [That the world is round] is obvious.

b *Is [that the world is round] obvious?

Grosu (1972：71) は、この種の問題について、'Discontinuous components

are perceptually complex in proportion to the structural complexity of the intervening material.' という。この 'intervening material' とは、ここでは(b) [that the world is round] のことで、(b) の非文の原因はまさしく、介在する that 節のために、「連続のよさ」がなくなり、基本的な語順が乱れ、'perceptually complex' (知覚的に複雑) で分かりにくくなっている。これは「文主語制約」もおなじ枠ぐみで説明してくれる。

また「再処理の必要」(the need of REprocess) (Bolinger 1978: 123) が関わる、つぎの (c) の文の「二重転移」も連続のわるさが原因といえよう。

c　*This book, Mary, I gave to.

d　*Who, about the secret, does John believe that Mary told to…?

d'　John believes that Mary told to Sue about the secret.

また、上の (d) のように、(d') から Mary の疑問化と about the secret の話題化の二つの要素の移動を同時に変えるなど、文構造をいちじるしく変える語順移動が 2 度あってはいけない、とする中島 (1984) もここに入るべきものであろう。

2.3　閉鎖

The boat floated on the water sank.

のような「袋小路文」(garden path sentence) も、われわれの知覚には、できるだけはやく「閉じる」という 'a mechanism of establishing 'closure' of units as soon as possible' (Reinhart 1976: 201) が働いているからに他ならない。

こうして見てくると、いままで触れた文法にとって、「局地性」(locality) とは「近接」のことであり、「島」とは「閉鎖」のことであるといっていいであろう。つぎには、これらのことをふまえ、1.1－1.6 の制限をすり抜ける例を見て

いきたい。

ここで見てきた、いくつかの特質というものは、これから見ていく性質にもあてはまるものであるはずである。

3．制限をすり抜けたいくつかの例

上では、文をつくる要素の移動には、文の基本的な語順をできるだけ乱すまい、という力が働いていることを見た。ここではこれらがあてはまらないいくつかの例をみることにする。

3.1　等位構造制約の場合

さきに1.2.3で見た「等位構造制約」では、接続詞でつながれた要素の一方だけを移動させることはできないとするものであった。ところがつぎの例をみよう。

Here's the whiskey which I went to the store and bought….

これは、went to the store and bought whiskeyという等位構造の一方の構成要素bought whiskeyからwhiskeyだけを移動させているのに非文になっていない。一つ考えられるのは、ここの等位構造は、(A and B)＝(B and A)という関係ではない、ということである。went to the storeよりもboughtと言う'main verb'（Deane 1991: 23）の方から「抜き出し」がされている。また、went to the storeとbought whiskeyが「時間的に連続した一連の行動」('sequences of events')（Deane 1991: 6）であり、「よい連続」をなしており、意味的にもまとまりがあることが関係あると思われる。

3.2　随伴の場合

つぎに、pied piping（随伴）にかかわる例を見よう。

a　Who is Alex trying to make up to…now?（「誰に取り入ろうとしているのか」）

b　*To whom is Alex trying to make up……？

ここの（b）の文は、さきに見た1.4の（b）To whom was John speaking……? は(a)とはちがい非文になっている。この非文の理由は、make up to～で、'～に取り入る' という「意味をもつまとまり」となっている。概念的に近いものは、言語的にも近くなる、と Haiman（1982：782）はいう。(b) が非文なのは、一つの意味単位をなすはずのものが、to……make up が、もはやまとまりをなさなくなっているからであろう。

3.3　下接の条件の場合

上の1.6で見た「下接の条件」は、要素が、二つ以上の循環接点を越えて移動していけない、とするものであった。しかし、つぎの例を見よう。

a　What did you see a picture of…？

b　*What did you destroy a picture of…？

ここでは、a picture of…という NP と、you see…という S という二つの接点を越えて what が文頭に移動しているにもかかわらず非文となっていない。ここで see a picture は知覚しやすい（Grosu 1982: 64）、「自然なつながり」であるが、destroy a picture は、see a picture に較べると 'less predictable collocation'（「予想しにくい言いまわし」）（Ogle 1981: 129）また、see a picture は 'stereotyped' であり、destroy a picture は 'unexpected'（Deane 1991: 31）である、といってもいいかもしれない。これは確実に、後でみる「下接の条件の場合」とも関わる。

3.4 複合名詞句制約の場合

a *What do you believe Mary's claim that John met…?

b Who do you make the claim that John met…?

c *Who do you deny the claim that John met… ?

(a) はまさしく、複合名詞句制約で非文になる。(Mary という指定的な語があることにも注目しておこう) しかし (b) はこの制約にかかるはずなのに許容されている。これは make a claim というつながりが、自然なつながりで、make the claim=claim (「主張する」) ('easily paraphrased by a single word') (Deane 1991: 5) ほどの意味であり、(b) は、Who do you claim that John met…? と同義である。さらに、(c) では deny the claim が、(b) の make the claim と比べて「予想しがたい」つながりであることに注目したい。(3)

3.5 上位範疇優先の原理の場合

つぎの例を見よう。

a What are you certain about giving…to John?

b What are you certain about [$_{NP}$ [^{S}…give [$_{NP}$ what]]] Green and Morgan (2000: 103-4)

(a) は (b) で見るように、about のあとに二つの NP があり、下位の NP からの NP の移動は非文を作るはずであるが、許容されている。

3.6 下接の条件の場合

[^{CP} who did [^{IP}John [^{VP}saw…]]]?

ここでは、who が、VP、IP を越えているのに非文となっていない。who が saw に L (exical) 標示され、この部分は補部となり、障害にはならない (Chomsky 198: 6: 15) というのである。

ここまでは、移動に関わる制限のうち、それをすり抜けるいくつかの例を見てきた。2.1－2.6 には共通の理由があるのであろうか。また、あるとすれば、それは何であろうか以下ではそれを見ていきたい。

4．問題解決への視点

ここではつぎの 3.1～3.4 の例から、解決の方法をさぐりたい。

前の章で見たさまざまな例が、統語的な理由よりは、むしろ、意味的な理由によるものであることを示しているように思われる。つぎの章では、さらなる事実によって、この議論をすすめたい。

4.1 Reanalysis（再分析）

a Many linguists argued for this solution.

b This solution is argued for…by many linguists.

(a) の文に対して (b) の受動態が可能である。このことは、for this solution は、もはや「付加部」(adjunct) ではなくなり、この for が動詞 argue とつながり、argue for となり、これが事実上、advocate という一つの他動詞と同じような意味をもっているからだと思われる。つまり [argue] [for this solution] が [argue for] [this solution] と「再分析」されたわけである。天野 (2000：309) にも「再分析の可能性を左右するのは [V＋P] が一つの意味単位 (semantic unit) であるかどうかである」とある。つぎの場合はどうであろう。

4.2 Preposition stranding（前置詞残留）

a *Which city did you meet Mary in…?

b What conclusion did John arrive at… ?

(a)、(b) いずれも前置詞で終わっているが (a) は非文である。このちがいは、つまるところ、上の 4.1.a の argue for が一つの動詞のようにふるまっているのと、まったく同じように (b) の arrive at が 'tightly connected' (Takami 1992: 26)、'close association' (Bolinger 1972: 119) であるからに他ならない。arrive at は、まさしく 'semantic unit' (Siegel 1983: 186) として他動詞のようにふるまっているのである。

4.1－4.2 からは、

(1)移動の結果できる意味的なまとまりをなす「自然なつながり」は、要素の移動の障碍にはならない、

ということであろう。

4.3 Bridge verb（架橋動詞）

a She said that Bill had hit Fred.

a' What did she say that Bill had done…?

b She purred that Fred had given her a present.

b' ??What did she purr that Fred had given her…

要素の移動が許容されるか、どうかについて、(a')、(b') を分けているには、

say と purr のちがいである。Purr には 'speak in a low soft voice'（OED）とあるように、purr は say より情報量が多い。Chomsky (1977：83) は、この (a')、(b') のちがいの理由を 'unclear' だというが、say と purr の情報量のちがいが理由であることは、つぎの「指定主語条件」を見てもまちがいない。

4.4 Specified subject condition（指定主語条件）

Chomsky（1973）は、(a)、(b) の例から（c）の下接の条件を提案した。

a　The men saw the picture of each other.

b　*The men saw John's picture of each other.[4]

c　Specified Subject Condition: No rule can involve X, Y in the structure…X…[α…Z…WYV…]…, where Z is the specified (i. e. non-pronominal) subject of WYV and a is a cyclic node (NP or S).

(a)、(b) の許容のちがいは the picture, John's picture のちがい、つまり John's が the よりも、より specified (non-pronominal) であるからにほかならない。これらを越えて、主語 the men と each other が関係づけられていることにその原因がある、というのである。しかし、つぎの例を見ると（a)、(b) の例は (c) とはべつのことを示しているようである。すでに見た 3.3 の (b)、3.4 の（a)、(c) を（d)、(e)、(f) としてとりあげる。

d　*What did you destroy a picture of…?

e　*What do you believe Mary's claim that John met…?

f　*Who do you deny the claim that John met…?

(e) の文は「下接の条件」の例としてあげたものであるが、この中の Mary's は、Chomskyが、「指定主語条件」を導きだすためにあげた上の (b) の例の John's とおなじ働きをしているのではないだろうか。どの場合も、これら Mary, John

が壁になって、要素の抜きだしや関係づけを妨げていると考えればよい。

(f) はやはり非文であるが、(e) の場合とはちがい、動詞が deny となっている。make であれば「自然なつながり」となるが、deny the claim はそうではない。とすると、つぎの Erteschik-Shir & Lappin (1979: 71)の 'the more unusual the matrix verb, the less easy extraction is' こそ、ここにあてはまる。この 'unusual' な動詞こそが who の抜きだしをさまたげていることになる。まったく同じ理由で (d) を説明できるであろう。すなわち、see a picture などより、destroy a picture は「予測しにくい言いまわし」('less predictable collocation') である。このように 'unusual' で 'less predictable' なところほど、ことばとして処理しにくいはずである (荻原 2004：101-102) が、つぎの指摘はこれをはっきりのべたものといえよう。'Low processing cost increases relevance' (Deane 1988: 107)、'the smaller the processing effort, the greater the relevance' (Wilson and Sperber 1992: 134)．また予測しにくいところほど「優位」(dominant) になる、といっていることも重要である。4.3－4.4 から結論できることは、

(2)名詞であれ、動詞であれ、特定的で意味情報が豊かな部分は優位になり、語順の移動の妨げになる、

ということであろう。

4.1－4.4 からひきだされた(1)、(2)のまとめを、Grosu (1972) の例で確認する。

h　I gave John a picture of himself.

i　?I gave John that picture of himself.

j　*I gave John Mary's picture of himself.

k　**I gave John Mary's sister's daughter's picture of himself.

これらの例をみると、たしかに（h）の a picture、（j）の Mary's picture をこえて、himself と John を関係づけようとしており、「指定主語条件」の問題である。つまり、picture につく表現が a＞that＞Mary's＞May's sister's daughter's のように、特定的・限定的になるほど許容度が低くなっており、許容度に段階があることに注目しておく。さらに注目すべきは、つぎの Grosu（1972）の例である。

l　A man just left who was wearing a hat.
m　?The man just left who was wearing a hat
n　??That man just left who was wearing a hat.
o　*John's brother just left who was wearing a hat.
p　**John's brother's son's daughter just left who was wearing a hat.

(l)－(p) の文は、a＞the＞that＞John's＞John's brother's son's と許容度が低くなっていくのは (a)－(g) と同じであるが、これらの文は「指定主語条件」に抵触しているわけではない。(a)－(g) の非文の理由と (k)－(l) の非文の理由は何であろうか。(a)－(g) と (l)－(p) の共通項は何であろうか。

文にはかならずその文の一番主張したい部分、焦点がある。それは一般に end-weight といわれるように文尾にある。上の文で見てきた許容度のちがいはこのことに関係があるのではないか。とすると、(b) の each　other、(f) の himself はその文の焦点であるはずであるが、この焦点と「特定的な」John が衝突している、このことが非文の原因ではないか、という予想をたてることができる。

このように考えると、上で見た「架橋動詞」の例も説明できることになる。すでに見た

q　What did she say that Bill had done…?（＝4.3（a））
r　*What did she purr that Fred had given her…?（＝4.3（b））

(q)、(r) の許容度のちがいは say と purr だけである。すでにみたように、purr は say より、はるかに情報量は大きい。'purr' について 'more informative' (Deane 1991: 37) といえよう。

これまでの例から言えることは、名詞であれ、動詞であれ、特定的で情報量の多いものは非文をつくりやすいのではないか、と考えることができる。すでにみたように、Chomsky が、「架橋動詞」をこえて wh 移動ができる理由が 'unclear' である、としたのは、まさしく、その原因は当然考慮されるべき「指定主語条件」が架橋動詞とおなじ枠ぐみの中で扱われていないことが理由であるはずである。

これまでの観察ではっきりしてきたことはつぎのようになるであろう。どの文にもいちばん伝えたい、焦点になる部分があるはずであるが、それに衝突するような意味的に優位になる部分があってはならない。3.6 で見た「下接の条件」をもれる例、Who did John saw…? などの例において、who が saw に L 標示されると障害にはならならず、語彙的主要部 saw の補部になる (安藤・小野 1993：150) というのは、結局は saw にたいする目的語であるという who の機能がはっきりしている、というのがその理由であるはずである。つまり、基本的には、移動は各要素の機能が明確であるかぎり許される (これが「A 位置」への移動がかのうである理由であるはずである) が、

> 名詞であれ動詞であれ、特定的で、意味的に優位になりやすいところは語順の移動の障碍になる。しかし要素の移動の結果できる、新たな、意味的なまとまりをなす「自然なつながり」は、語順の移動の障害にはならない、(5)

ということが、3.1−3.5 に共通に見られることのようである。別の言い方をすれば、語のつながりが、自然で、予測できる (predictable) ようなものであるとき、1.1−1.6 にあげた制約が働かないこともある、と言えそうである。(6)

語順の移動は、文の構造をいちじるしく変え、各要素の機能を不明にするものであってはならないのである。Hankamer (1973：41) が「構造回復条件」

(Structural recoverability condition) で、「もとの構造が回復できないような消去規則は適用されない」としているのも、結局、そのもとの文の基本的な構造を保持するためである、ととれるであろう。

5．まとめ

0．では、語順が英語では、きわめて重要なものであることを見、1．では、語順をまもる規則がさまざまな形で提案されていることを見た。2．では、この提案をすり抜ける例があることを見、3．では、いくつかの実例によって、1.1−1.6 で見た規則をすりぬける例について、これらは、意味的・機能的な理由によるものであって名詞であれ動詞であれ特定的なものは優位になり他の要素の移動をさまたげること、さらに、この優位さは段階的な性質ものであることも見た。(7) 要素の移動の結果、意味的にまとまりのある「自然なつながり」になる場合には、そこが語順移動の妨げにはならないこと、そこが知覚の混乱をおこす箇所とならないからだと思われることも見た。これを統語だけの問題として処理しようとすることには大きな事実誤認がある、といわなければならないであろう。Jackendoff (2006：37) が生成文法の「統語中心主義」(syntactocentrism) を批判するのは、まさしくこの理由のずである。

注

(1) Sabel (2003：291) の 'Every non-complement is barrier' は、その要素の機能が明解でないとき、要素の移動を妨げる、と解することができる。

(2) Keenan and Comrie (1977：66) は、関係節をとりやすい要素として、

SU＞DO＞IO＞OBL.＞OCOMP (OBL: major oblique case)

とあり、主語、直接目的語、間接目的語の順になっているには、文の中で語順と機能が明白なものほど補足的な要素を受け入れやすいということを示していると思われる。

(3) 「自然なつながり」については、つぎの Deane（1988：103）の例

i.a　Who did John take a picture of…?

b　*Who did John destroy a picture of…?

と、'The crucial difference seems to be whether the verb's meaning naturally focuses on the NP to be extracted' という説明は大いに参考になる。

(4) 今西・浅野（1990：106）には McCawley（1988：358）からの引用としてつぎの文をあげている。

i.a　*John saw [Ann's description of himself].

b　John saw [a description of himself].

この許容度のちがいは、明白に Ann's と a の特定性・限定性のちがいが原因である。

(5) 田窪（2004：81）に、「指定主語は節の中で最も「際立った」要素であり、それが現われると、一つの独立した「領域」が形成されるものと考えられる。そうだとすると、時制文の場合と同様に、指定主語の存在によって形成された領域の内部の要素も、その外部の要素（または位置）と関係を持つことができないことになる。」とあるが、これは筆者の主張にちかいといえる。

(6) このように考えると、つぎの例は簡単に説明される。

i　There lay/?slept/??dreamed in the corner a raggedly young man.

この文で焦点は a raggedly young man である。それに対し、主節動詞が単なる「存在」以上の意味を持つほど許容の度合いが低くなっている。「動詞がはっきりと場所あるいは方向を示すほど、この構文の容認度はたかくなる」(Green and Morgan 2000: 162) はいかにも的外れな説明である。この点から見れば、

ii　*In the nursery smile half a dozen new-born babies.

は文尾の焦点のほかに情報量が多い smile があるのが非文の原因と考えられるが、こ「この構文に現われる動詞は（中略）情報的に軽い（informationally

light）内容をもつ動詞に限られる」（大庭・島 2002：182－3）としているのは適切である。

いわゆる 'lie test'（Erteschik-Shir and Lappin 1970）も、この情報量の問題にふかくかかわっていることについては葛西（2006）を参照。福地（1985：43）にも言及がある。

さらに、一見、関係がないようなつぎの例も説明できる。

iii　*Only John drinks BEER.

この非文について、田子内・足立（2005：165）は「焦点化副詞（＝only：引用者）は文構成素の左には生じることはできないという制限を」たてなくてはならない、というが、これは正確ではないといえよう。正しくは、焦点 BEER のほかに、あらたに焦点化された John が衝突するからにほかならない。

なお、wh 移動と前置詞残留の関係、とくに意味的観点からの関係の可能性については Sano（1983：119）に言及がある。

(7)　これは、clause のレベルでも同様のようである。Van Valin and LaPolla（1997：480）につぎのようにある。'the closer the semantic relationship between two propositions is, the stronger the syntactic link joining them is.'

参考文献

安藤貞雄　2005　『現代英文法講義』　開拓社

安藤貞雄・小野隆啓　1993　『生成文法用語辞典』　大修館書店

天野政千代　2000　『英語二重目的語構文の統語構造に関する生成理論的研究』　英潮社

荒木一雄（編）　1999　『英語学用語辞典』　三省堂

Beukema, F. and T. Hoekstra 1984 'Extractions from *with*-constructions' L. I. 15-1: 689-698

Bolinger, D. 1978 'Asking more than one thing at a time' Hitz, H.(ed) *Questions* 107-150 Reidel Pub. Company

Chomsky, N. 1964 *Current Issues in Linguistic Theory* Mouton

Chomsky, N. 1973 'Conditionson transformations' Anderson and Kiparsky (eds.) *A Festschrift for Morris Halle* Holt, Rinehart and Winston 232-86

Chomsky, N. 1977 'On *wh*-movement' Culicover, Wasaw, andAkmajian (eds.) *Formal Syntax* Academic Press 71-132

Chomsky, N. 1986 *Barriers* MIT Press

Chomsky, N. 1988 *Language and Problem of Knowledge* MIT Press

Colins 2005 *Collins COBUILD English Grammar* HarperCollins Pub.

Deane, P. D. 1988 'Which NPs are there unusual possibilities for extraction from?' *CLS* 24: 100-111

Deane, P. D. 1991 'Limits to attention: A cognitive theory of islands phenomena' *Cognitive Linguistics* 2: 1-63

Emonds, J. 1972 *Root and Structure-preserving Transformation* Doc. Dissertation Indiana Univ. Linguistics Club

Erteschik-Shir 1973 *On the nature of Island Constraints* Indiana Univ. Press

Erteschik-Shir, N. 1981 'More on extrability from quasi-NP's' *LI* 12: 665-670

Erteschik-Shir, N. & S. Lappin 1979 'Dominance and functional explanation of island phenomena' *Theoretical Linguistics* 6: 81-96

Fries, C. C. 1941 *American English Grammar* Maruzen Pub. Company

福地　肇　1985 『談話の構造』 大修館書店

Giorge, A. 'Toward a theory of long distance anaphors: a GB approach' *Linguistic Review* 3: 307-391

Givon, T. 1993 *English Grammar: A Function-Based Introduction II* John Benjamin Pub. Company

Goldberg, A. E. 1995 *Constructions* Univ. of Chicago Press

Green, G. M. and J. L. Morgan 2001 *Syntactic Analysis* [『言語分析の技法』中沢・伊藤訳　東京大学出版会 2000]

Grosu, A. 1972 'The extragrammatical content of certain "island constraints"' *Theoretical Linguistics* 91: 19-67

萩原裕子　2004　『脳にいどむ言語学』　岩波書店

Haiman, J. 1984 'Iconic and economic motivation' Lg. 60: 781-819

Hankamer, J. 1973 'Unacceptable ambiguity' L. I. 4-1: 17-68

原口庄輔・中村捷（編）『チョムスキー理論辞典』　研究社出版

畠山雄二　2004　『英語の構造と移動現象』　鳳書房

Huang, C-T. James 1982 Logical Relations in Chinese and Theory of Grammar Doctoral Dissertation

今西典子・浅野一郎　1990　『照応と削除』　大修館書店

Jackendoff, R. 2002 *Foundations of Language* Oxford Univ. Press [『原語の基礎』郡司訳　2006　岩波書店]

葛西清蔵　1998　『心的態度の英語学』　リーベル出版

葛西清蔵　1999　「もう一つの経済性」『英語学と現代の言語理論』北海道大学図書刊行会　112-122

葛西清蔵　2004　「言語・認識・創造性」札幌大学外国語学部紀要『文化と言語』61：1-65

葛西清蔵　2006　「「付加語条件」とは何だったのか」　札幌大学外国語学部紀要『文化と言語』　65：11-29

葛西清蔵　2007　「*Who was John shot kissing? はなぜ許容されないか」『札幌大学総合論叢』　23：111-118

Keenan, E. L. and B. Comrie 1977 'Noun phrase accessibility and universal grammar' *L. I.* 8-1: 63-99

Kirsner, R. S. and S. A. Thompson 1976 'The role of pragmatic inference in semantics: A study of sensory verb complements in English' *Glossa* 10-2: 200-240

Lakoff, R. 1979 'Linguistic gestalt' *CLS* 13: 296-287

Morgan, J. L. 1975 'Some interactions of syntax and pragmatics' *Syntax and Semantics* 3: 289-304

McNulty, E. M. 1988 *The Syntax of Adjunct Predicate Doc. Dissertation* Univ. of Connecticut

中島文雄・毛利可信　1958　『高等英文法』　山口書房

中島平三　1984　『英語の移動現象研究』　研究社出版

Ogle,, R. 1981 'Redefining the scope of root transformation' *Linguistics* 19: 119-146

大庭幸男・島　越郎　2002　『左方移動』　研究社

Otsu. Y. '1977 'Dative question and perceptual trategies' *Studies in English Linguistics* 163-173

Postal, P. M. 1998 *Three Investigations of Extraction* MIT Press

Reinhart, T. 1976 *The Syntactic Domain of Anaphora* MIT Doc. Diss.

Ross, J. R. 1967 *Constraints on Variables in Syntax* Indiana Univ. Linguistics Club

Ross, J. R. 1973 'The same side filter' *CLS* 9: 549-67

Sabel, J. 2002 A minimalist analysis of syntactic islands' *Linguistic Review* 19: 271-315

Sano, M. 1983 'Semantics of preposition stranding' *Tukuba English Studies* 2: 97-127

Siegel, M. E. A. 1983 'Problems in preposition stranding' *L. I.* 14-1: 184-188

Takami. K. 1992 *Preposition Stranding* Mouton

田子内健介・足立公也　2005　『右方移動と焦点化』　研究社

田窪行則　2004　『生成文法』(『言語の科学』) 6　岩波書店

Van Valin, R. D. Jr. and R. J. LaPolla 1997 *Syntax* Cambridge Univ. Press

Wilson, D. and D. Sperber 1992 'An outline of relevance theory' Konishi, T. et al.(eds.) *Current Approach to Linguistics*

安井　稔（編）　1996　『コンサイス英文法辞典』　三省堂